

日本英文学会関東支部
第 21 回（2022 年度夏季大会）
プログラム

日時： 2022 年 6 月 18 日（土）

会場：青山学院大学 青山キャンパス 17号館

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

アクセス

JR 山手線、JR 埼京線、東急線、京王井の頭線、東京メトロ副都心線 他「渋谷駅」より徒歩 10 分
東京メトロ（銀座線・千代田線・半蔵門線）「表参道駅」より徒歩 5 分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

青山キャンパスへの入構方法

大会に参加予定の会員・関係者は、本プログラムをスマホの画面表示、あるいは事前印刷物で正門に待機している委員あるいは守衛に提示し大会参加の旨を伝えてください。

《現在、正門からのみ入構可能となっております》

キャンパス入構時の遵守事項

([大学からの注意事項](#)に準ずる)

- 入構前に、体温測定等の体調確認を行い、体調がすぐれない場合は入構を控えてください。
- 不織布マスクを常時着用し、手洗いやうがい、手指消毒等をこまめに行ってください。
- 「新しい生活様式」を実践し、[「3密」](#)や[「5つの場面」](#)を避けてください。
- 収容人数コントロール中のため、教室では3人掛け椅子の両端のみご利用いただけます。
- 教室収容人数の3分の2を超過する場合には、入室を制限することがございます。
- 感染発覚時の動線確認のため、大会に関係のない施設への立ち寄りをご遠慮ください。

*会場番号： 174XY は 17 号館 4 階の XY 番教室となります。

12:20-	開場・受付開始 (受付：17 号館 4 階、控室：17405 番教室)		
研究発表 1 13:00 13:40	第 1 室 17407 番教室	第 2 室 17408 番教室	第 3 室 17406 番教室
	『虚栄の市』における ベッキーの「技巧 (art)」に関する考察 —挫折する模倣と不完 全な語り— (発表者) 岡本佳奈 (司会) 廣田美玲	仲介される啓示と恩寵： C. S. ルイス SF3 部作に 見る中世・ルネサンスの 宇宙像の影響 (発表者) 高田ひかり (司会) 芦田川祐子	開催なし
研究発表 2 13:50 14:30	第 1 室 17407 番教室	第 2 室 17408 番教室	第 3 室 17406 番教室
	<i>Not I</i> における 言葉・主体・身体 (発表者) 川島 知也 (司会) 木内久美子	The Theme of Mourning in J. M. Coetzee's <i>Life & Times of Michael K</i> (発表者) 養老 明子 (司会) 遠藤不比人	核戦争の“thinkability” ——Martin Amis, <i>Einstein's Monsters</i> (1987) について—— (発表者) 齋藤 一 (司会) 渡邊真理子
部門別 シンポジウム 14:40 16:40	【シンポジウム 1】 イギリス文学部門 17410 番教室 詩とポピュラリティー： 大学で身体に気づいてもらうため の仲介 (司会) 諏訪友亮 (講師) 阿部公彦 (講師) 原 成吉 (講師) 四元康祐		【シンポジウム 2】 アメリカ文学部門 17511 番教室 現代アメリカと文学と戦争 (司会・講師) 加藤有佳織 (講師) 中村 理香 (講師) 上岡 伸雄

17:00 19:00	<p>懇親会（会場：「アンカフェ un café」）</p> <p>会費：6300 円（事前振込）／7000 円（当日支払）</p> <p>渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山ガーデンフロア TEL 03-5469-0275</p> <p>COVID-19 対応のため参加条件や参加人数の上限を設け、受付は Web アンケート申込先着順といたします。詳細は関東支部 HPに掲載します。</p>	

開場・受付開始 (12:20 より 17号館4階にて)

13:00-13:40 【研究発表 1】

第1室 (17号館4階 17407番教室)

(発表者) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士後期課程 岡本佳奈
(司会) 獨協医科大学助教 廣田美玲

『虚栄の市』におけるベッキーの「技巧 (art)」に関する考察
—挫折する模倣と不完全な語り—

本発表はウィリアム・メイクピース・サッカレーの小説『虚栄の市』(1847-48)を取り上げ、作品の中心的な登場人物であるベッキー・シャープの「技巧 (art)」を分析する。ベッキーは独力で階級上昇を目指す点においてヴィクトリア朝時代の性規範から逸脱する女性である。一方先行研究では、彼女はあくまで社会に求められる女性のジェンダー役割に迎合しているという点において、フェミニズム的な意味での限界を持つことも指摘されてきた。だが本発表は、むしろそうした役割を意識的に演じる「技巧」にこそ、本質主義的なヴィクトリア朝的価値観への諷刺性があることを考察する。そしてこのようなベッキーの「技巧」の性質は、物事の本質へ不用意に迫るのではなくその外見を語ることに拘る語り手の姿勢と近似しており、両者の「模倣／語り」の特徴にサッカレー作品のリアリズムを見出すことができる。

第2室 (17号館4階 17408番教室)

(発表者) 上智大学文学研究科英米文学専攻博士後期課程 高田ひかり
(司会) 文教大学教授 芦田川祐子

仲介される啓示と恩寵：

C. S. ルイス SF3 部作に見る中世・ルネサンスの宇宙像の影響

C. S. ルイス(Clive Staples Lewis)のキリスト教思想を反映した SF3 部作 *Out of the Silent Planet* (1938)、*Perelandra* (1943)、*That Hideous Strength* (1945)において、人間は神「マレルディル」(Maleldil)と直接に対話する術を持たず、常に何らかの仲介者を通じてその意思を知り、恩寵を受ける。天使的な存在である「エルディル」(eldil)たちだけでなく、一介の人間に過ぎない主人公ランサム(Erwin Ransom)もまた、エルディルたちから伝えられたマレルディルの意思と恩寵を他の人間たちに伝え、分け与える役割を果たしている。本発表では、中世・ルネサンス期に

絶大な影響力を持った偽ディオニシオス・アレオパギタ(Pseudo-Dionysius Areopagita)の著作がルイスに与えた影響を考察することで、彼がこのように複雑な仲介システムを作り出した背景と意図を明らかにする。また、ルイスがSFの中で強調する一般信徒の霊的成長に着目し、その現代性と独自性を明らかにする。これにより、ルイスの作品群において極めて重要な主題である他者との関わりという問題を新たな側面から考察したい。

13:50-14:30 【研究発表 2】

第 1 室 (17 号館 4 階 17407 番教室)

(発表者) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士後期課程 川島 知也
(司会) 東京工業大学准教授 木内久美子

*Not I*における言葉・主体・身体

本研究はサミュエル・ベケット (1906–1989) の戯曲 *Not I* (1972) を扱う。この作品の特異性は、ベケットが散文作品において探求してきた言語における不在性と、演劇作品における避けがたい現前性とが交差する点にある。*Not I*の舞台上は、「口」と「聴き手」にあたるかすかな光のほかは暗闇である。また、台詞を語る唯一の存在である「口」は、口以外の身体の部分を欠いている。いわば、語る主体を構成するはずのコンテクストは、この作品において、限りなくゼロに近い状態まで切り詰められている。しかし、闇のなかで語る「口」の状況が、その言表によって補完されることはない。それどころか、「口」の語りにおける自己言及的なしぐさは、言語における不在性を浮き彫りにし、現前する「口」と語られる言葉とのあいだにずれを生み出していく。ベケットは舞台における現前性と言葉における不在性のあいだで、あらゆる主体が消失する空間を創出するのである。

第 2 室 (17 号館 4 階 17408 番教室)

(発表者) 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士後期課程 養老 明子
(司会) 成蹊大学教授 遠藤不比人

The Theme of Mourning in J. M. Coetzee's *Life & Times of Michael K*

In *Life & Times of Michael K* (1983), J. M. Coetzee depicts Michael K as a character who engages in the work of mourning through the cultivation of crops. In my presentation, I compare the contents of the novel to the actual context of mourning and farming in South Africa under apartheid. Because of the text's metatextual quality, attention needs to be paid to its historical context in order to be fully appreciated. I also point out the author's inversion of the tropes of the South African pastoral novel (plaasroman). I argue that K's object of mourning extends beyond the death of his mother; it includes the deaths of countless others and the loss of mourning itself in human society. I then contend that Coetzee portrays the death of K's mother as a story that has the possibility to form a community.

第3室（17号館4階17406番教室）

（発表者）筑波大学人文社会系准教授 齋藤 一
（司会）専修大学教授 渡邊真理子

核戦争の“thinkability”

——Martin Amis, *Einstein's Monsters* (1987)について——

イギリスの小説家、マーティン・エイミス（Martin Amis, 1949-）は、日本では1990年代頃から翻訳され論じられたが、2010年代以降は話題にされていない。しかし、核戦争勃発の可能性が高まっている今こそ、核文学作家としてのエイミスに注目すべきだろう。短編小説集 *Einstein's Monsters* (1987)の序文である“Introduction: Thinkability”において、エイミスはSDI（戦略的防衛構想）などの核兵器擁護言説を容赦なく批判しているが、その批判の前提には、戦略核兵器は人類の絶滅をもたらし、人間の思考を完全に無意味にするという認識がある。この認識は、戦術核兵器の限定的使用や原発攻撃などといった、21世紀の核戦争について考える際には直接参考にはならない。ただしエイミスは、自らの思考も時代の産物であると意識しつつ、J・G・バラードなどのSF小説なども参照しながら核戦争についての思考を深め、新たな表現を模索していた。短編“The Time Disease”は、核戦争後の2020年、感染症が蔓延する状況下の生／性を描いており、エイミスの思考の射程を示すものとして議論する価値がある。

【部門別シンポジウム】 14:40-16:40

<シンポジウム1：イギリス文学部門> 17号館4階17410番教室

（司会）実践女子大学専任講師 諏訪友亮
（講師）東京大学教授 阿部公彦
（講師）獨協大学教授 原 成吉
（講師）詩人 四元康祐

詩とポピュラリティー：大学で身体に気づいてもらうための仲介

（文学的な）詩に人気がないことは今に始まったことではない。小説、映画、ストリーミング動画など、後続のメディアにつぎつぎと追い抜かれ、詩を専攻するゼミ希望者、若手研究者の数は年々減る一方である。

詩とポピュラリティーの関係は、詩が教育のカリキュラムに組み込まれた以降も難しい問題をかかえてきた。一部の人々の間で長らく流通してきた詩は、現代に至るまでポピュラーになることに失敗しつづけてきたとも言える。

本シンポジウムでは、大学という場で詩を教えている三方をお迎えし、詩がポピュラーになることの難しさについて考えたい。阿部公彦氏、原成吉氏は、おそらくイギリス詩、アメリカ詩の現役教員の中で、学生たちを最も多く育ててきた二人である。四元康祐氏は谷川俊太郎のポピュラー詩の系譜を受け継ぎ、大手出版社から詩集を出版、精力的に国内外で詩のリーディングを行っている。

「甘い言葉」は信用できませんか？ ～

大学の教室で、詩の甘美さと出会う方法

阿部公彦

かつて言葉の世界に君臨していた詩は、今や文学の中でもマイナーな領域となってしまった。その原因の一つは、詩を支えてきた価値と私たちがうまく付き合えなくなっていることにある。とくに「気高さ」と「甘美さ」だ。

実は、巷には「気高さ」や「甘美さ」があふれている。人類は決してこうした価値と決別したわけではない。それどころか、以前にも増してこれらを求めている。しかし、近現代の「知」は、「気高さ」を幻想として、「甘美さ」を通俗として警戒するようになった。

この乖離をどうしたらいいのか。そもそも、この乖離は修復されるべきものなのだろうか。今回はとくに、「知」が交錯する場としての大学で、どのように詩と出会うことが可能か、という観点から提案を試みたい。

アメリカ詩を教室へ届ける13の方法

原成吉

詩は、大学生にとって身近な存在とは言いがたい。ましてアメリカの詩となれば、なおさらのこと。詩は読まれるのを待っているが、なかなか読者はやって来てくれない。だから詩人の手紙を届ける、いわば詩の郵便配達人が必要になってくる。この郵便屋は数こそ多くはないが、その仕事はかなりおもしろい。

ビート詩人の Diane di Prima は、「詩は喜びをもたらし、悲しみを和らげてくれる。それは異なる世界と数しれぬ文化に橋を架ける。／詩は雨をもたらし、穀物を育てることができる。それは旅人のために道をならし、熱にうなされる子どもに眠りを届けてくれる。／詩は心の叫びであり、心の憩い。それは私たちが見ている世界をいつも新しくしてくれる」という。

他の芸術と同じように詩の本質を教えるのは無理だが、その楽しみ方は教室で学生と共有できると思う。アメリカ詩をいくつか取りあげながら、活字の意味から離れた詩の美味しい食べ方を試してみたい。

教室に詩の野性を放つ

四元康祐

「詩のポピュラリティ」というのは、「曲がる直線」のごとく撞着語法（オクシモロン）ではないか。詩を普通の生活者に読んでもらおうと長年努力し続けて来た実作者としては、いささか被虐的にそう思います。詩はそれを本当に必要とする人に、隠微に届けられればいい、たとえその人が遠い未来に生きていようと。

けれども同時に、経済効率一辺倒で、過剰な同調圧力に喘ぐ現代日本の社会に暮らす私たちこそ、実はもっとも詩を必要としているのではないかと、とも思うのです。とりわけ、そのような社会に出てゆく前の、最後のサンクチュアリーである大学に学ぶ若者たちに、詩の力を身につけてほしい。研究対象としての詩ではなく、生き延びるための多義性に満ちた言葉の力を。外国における詩の在り方や、実際にいま詩人と学生たちの間で行われている作業を参考にしながら、詩の野性を教室に解き放つために何ができるかを考えてみたいと思います。

<シンポジウム 2：アメリカ文学部門> 17号館 5階 17511 教室

(司会・講師) 慶應義塾大学准教授 加藤有佳織
(講師) 成城大学教授 中村 理香
(講師) 学習院大学教授 上岡 伸雄

現代アメリカと文学と戦争

アメリカと戦争はつよく結びついている。世界最大規模の軍事力を保持し行使しているといういまの現実においてはもちろん、戦争をしているさなかにもそれを題材・背景とする物語をつくり上げる想像力においても、アメリカと戦争は切り離しがたい。戦争をするたびに、戦争をめぐる物語がつくられてきた。本シンポジウムは、とくに第二次世界大戦以降にアメリカ文学が戦争をどのように描いてきたか、そして描いてこなかったか、あらためて考える機会としたい。発表はそれぞれ具体的な作品や事象の分析をとおしてアメリカと文学と戦争の諸相を考察する。

アジア系アメリカ小説が描く戦争と「不都合な（正しくない）被害者たち」

中村理香

1月6日の連邦議会議事堂占拠事件でトランプ支持者らとともに旧南ベトナムの国旗を掲げた在米ベトナム系や、大日本帝国に共感し日本の植民地統治に参加した日系人など、アジア系アメリカには「正しくない被害者」が溢れている。本発表では、アジア系アメリカの戦争小説が、これら米国マイノリティの権利主張にとって「不都合な（正しくない）被害者」をどう描いてきたのか、John Okada の *No-No Boy* (1957) と Chang-rae Lee の *A Gesture Life* (1999) という、第二次世界大戦を舞台とする戦争小説二作を例に検証したい。

まず、兵役というシンボルのもと日系人の国民的同化が賞賛される1950年代の米国で、徴兵忌避者という皆が忘れた記憶を喚起し日系コミュニティの現状を描いた Okada に対し、Lee は、日本軍「慰安婦」制度にまつわる暴力とトラウマ的記憶を、対日協力者のコリアン・アメリカンの視点から「被害のなかの加害」というより複雑な記憶として表出した。発表では、戦争とそれに付随するトラウマ体験を、これら正しくない被害者に関わる、ある種「引き取り手のない記憶」として提示する両小説が、戦争の掲げるナショナルな物語への対抗言説として作動する可能性を探りたい。

「忘れられた戦争」を描く——朝鮮戦争と現代アメリカ小説

加藤有佳織

朝鮮戦争は「忘れられた戦争」と形容される。たとえば、Phil Klay の短編小説集『一時帰還』はイラク戦争従軍兵たちが語るが、その所収作品のひとつ「戦争の話」なかに、朝鮮戦争について「誰もあの戦争を覚えていない」と表現される場面がある。第二次世界大戦とベトナム戦争のあいだにある空隙のようなものとして、朝鮮戦争はたいてい受けとめられている。その一方で、とくにコリア系アメリカ文学において朝鮮戦争は重大な問題であり続けているし、さらに2000年代以降、朝鮮戦争に関する小説の存在感は増しているように見える。たとえば、アメリカ軍捕虜となった中国兵を描く Ha Jin の *War Trash* (2004) に続き、アメリカ軍による民間人虐殺事件を記す Jayne Anne Phillips による *Lark & Termite* (2009)、アメリカ軍・中国軍双方の視点を含む Jeff Shaara の *The Frozen Hours* (2017)、日本の植民地支配と朝鮮戦争によって強いられた家族離散を題材とする Eugenia Kim の *The Kinship of Secrets* (2018) や Crystal Hana Kim の *If You Leave Me* (2018) が挙がるだろう。発表では、アメリカの戦争小説の系譜を参照しながら、これら作品を考察したい。

Tim O'Brien と 21 世紀の帰還兵作家たち

上岡伸雄

戦争文学の金字塔的な（と少なくとも私が信じている）作品、*The Things They Carried* (1990) の作者であるベトナム戦争帰還兵の Tim O'Brien は、2001 年以降戦争を続けるアメリカに

直面し、しばしば自分が小説を通して訴えてきたことが逆効果に働いているのではないかという疑いと失望を吐露してきた。O'Brienのように徴兵されて戦地に赴く者がいなくなり、志願兵しかいないという状況下、反戦感情は盛り上がり、対テロ戦争を描く帰還兵の文学作品を見ても、*The Things They Carried*に匹敵する言説は生み出されていないようにも思える。実際のところはどうなのか。Elliot Ackerman、Matt Gallagher、Phil Klay、Kevin Powersら、対テロ戦争帰還兵の作家の作品を概観し、彼らのインタビューなども通して、彼らが何を目指し、どのような思いを作品にぶつけているのか、その可能性と限界について考えたい。

キャンパス・マップ



* 正門からのみ入構可

- (受付) 17号館 4階
- (研究発表) 17号館 4階
- 第1室 17407番教室
- 第2室 17408番教室
- 第3室 17406番教室
- (シンポジウム 1)
- 17号館 4階
- 17410番教室
- (シンポジウム 2)
- 17号館 5階
- 17511番教室
- (控室) 17号館 4階
- 17405番教室
- (書店展示) 17号館
- 4階ラウンジ

会場アクセスマップ・懇親会会場



(青山キャンパス) 渋谷駅・表参道駅からともに 246 号線 (青山通り) に沿って歩いてください。途中で青山学院大学があります。

(渋谷駅からだと右手、表参道駅からだと左手に見えます。)

(懇親会会場)

「[アンカフェ un café](#)」

青山学院大学から 246 号線 (青山通り) を向かい側に渡り、楕円形のビルと国連大学の間を 100 メートル程進むと屋外エスカレーターが見えてきます。そのエスカレーターを下ると、竹と緑に囲まれたサンクンガーデンにたどり着

きます。ガーデンに面して青山ブ
受付は Web アンケート申込先着順と

*懇親会会費：6300 円 (事前振込) / 7000 円 (当日支払)

* COVID-19 対応のため参加条件や参加人数の上限を設け、
いたします。詳細は[関東支部 HP](#) に掲載します。